

朝鮮大旱魃と「食糧戦争」について

小塩海平

武力戦争 vs 食糧戦争

若くして亡くなった私の祖父は、敗戦直前、庭でひなげしの花を育てていて、非国民扱いされたという。日本の軍隊が、圧倒的な武力を誇る連合軍の前に無惨な敗戦を迎えなければならなかったのは当然の成り行きであったとしても、非戦闘員である庶民の生活が極度に圧迫され、家庭が崩壊し、一切の人間らしい営みが否定され、草花一本育てることさえ命がけだったのは一体誰のせいだったのだろうか。花を愛でる心を失った大和魂は、誰のために、そして何のために戦っていたのだろうか。

庶民が強いられたこの銃後の戦争を象徴的に「食糧戦争」と呼ぶことにしよう。敗戦時の農林大臣であった石黒忠篤はこう言っている¹。

長期の戦争となりますと、武力と武力との争ひといふやうなことは一部分である。…今日の國としての存立の上から言へば、國家の總力を盡くしてお互ひが力競べをする、かういふことになつて來てゐるのでありまして、その大きな部分は食糧問題に懸かつてゐる。長期の戦ひとなりますとこの重大な問題が彌が上にも大事なこととなり、最後の決を決めるものになる。

国家と国家、軍隊と軍隊による武力戦争に関しては、ハーグ陸戦条約（一九〇七）やジュネーブ条約（一九二九）である程度ルールが決められていた。したがって、戦後、法廷が開かれてルール違反は処罰された。この裁判が戦勝国による一方的なものであり、本当の責任者がのうのうと生き残り、末端にいた下級兵士や朝鮮・台湾出身者を含む多くの軍人・軍属たちが、日本の戦争責任を肩代わりさせられたことは、是非とも明確にしておかなければならない理不尽な事実である。しかし、種々の問題がありつつも、日本がポツダム宣言を受け入れて戦犯の処刑に応じ、敗戦を認めてもらって国家の消滅を免れ、新しい憲法の下に歩みを始めたことは、この国にとって忘れてはならない重要なエポックであったといえるであろう。日本の教会も、こうして消滅を免れたのである。

一方、庶民が強いられた「食糧戦争」の方は、責任の所在が明らかにされていないばかりか、「戦争中から戦後占領時代にかけての国の存亡にかかわる非常事態においては、国民すべてが、多かれ少なかれ、その生命・身体・財産の犠牲を堪え忍ぶべく余儀なくされていたのであって、

¹ 『皇国農民の道』、1942 年 3 月、農業報國聯盟 90 ページ

これらの犠牲は、いずれも、戦争犠牲または戦争損害として、国民のひとしく受忍しなければならなかったところ」（最高裁判所大法廷判決（昭和四十三年十一月二十七日））であると片付けられている。このいわゆる「受忍論」は、「当時は日本国民であった」という理由により、旧植民地のあらゆる戦争犠牲者に対しても援用されている（例えば、韓国・朝鮮人元 BC 級戦犯者に対する戦後補償裁判一九九六年九月九日東京地裁判決）²。つまり私たちの生活は、新憲法の庇護の下にありつつも、旧植民地の人々とともに、いまだに受忍論の呪縛の下に置かれているのである。沖縄や福島や熊本における受忍が当然視されるようになっている今日、あるいは新憲法そのものが変えられようとしている今日、かつての「食糧戦争」の責任を問う意味は決して小さくないはずである。

私がこの小論で試みたいと考えているのは、「食糧戦争」を煽った農学者や農政者たちの言動の一端を紹介しつつ、その破綻が認識されないまま放置されている事実、そして何人かの著名なキリスト者の関わりについて確認することである。「食糧戦争」は、実は私たちの無関心の陰で、いまだに存続しているといってもよい。

以下、石黒忠篤の指揮下に闘われた「食糧戦争」を略述し、当時の食糧事情や肥料事情を一瞥しながら、「食糧戦争」に伴う様々な未決の責任について考えていくことにしたい。

朝鮮の大旱魃

食糧問題が喫緊に取り組むべき深刻な問題であることを日本政府が認識したのは、日中戦争（北支事変）が泥沼化してきた一九三九年（昭和十四年）のことであった。それまでは朝鮮米や台湾米の内地移入によって米の価格が暴落し、一時は減反政策が論じられたこともあったほどだが³、この年は朝鮮で大旱魃があり、約一千万石の減収により大量の外国米を手配しなければならぬ状況に陥った。主要食糧に切符制が導入され、配給体制が布かれるようになったのは、この朝鮮大旱魃の影響が決定的であった⁴。この時の旱魃が如何にすさまじいものであったかを、山野光雄の『食糧戦物語』から三カ所引用してみよう⁵。

² 筆者は学生時代から日本の戦争責任を肩代わりさせられた韓国・朝鮮人元 BC 級戦犯者の裁判支援と補償立法の成立のために尽力してきた。地裁、高裁、最高裁とも、受忍論によって彼らに対する謝罪と補償を退けたが、いずれも立法による解決を強く促している。しかし、立法府はいまだその責務を果たしていない。

³ 『石黒忠篤伝』（日本農業研究所、1969、岩波書店 218-226 ページ）。石黒はこのとき農林次官であり、内地は 4.4%、朝鮮は 10%、台湾は 30%減反するという臨時米穀作付減反案を立てたが通らず、1934 年 7 月 10 日に退官した。

⁴ 『食糧戦物語』（山野光雄、1943、東晃社 27 ページ）

⁵ 註 4 参照

記者は京城駅から京釜線で南下、平澤驛に下車して西方一里の鼓城面（村）に入り旱害地域に一步を印した。旱害の甚だしい南鮮七道の北端、京畿道の牙山灣に近い一農村だが、米作は平年の九分殆ど全滅と言つてよい。掘り返された儘眞白になつた田圃、一尺ばかりに伸びた稻が穂を抱へて枯死してゐる。赤く焦げて枯死へ近づいてゐる田圃があそこに一枚、此處に一枚と緋のやうに點綴してゐるだけだ。五月十四日の降雨を最後として六月卅日まで一滴の驟雨さへ見なかったといふのだ。…一水田に降り立つと地面はまるでアスファルトとやうに固まつて、鶴嘴でも使はない限り掘り返す術もない位だ。その中に潤ひも膨らみもない短い稻の莖がカサカサと風に動いてゐるだけだ。せめて藁にでもなれば一と農民の思ひも殆ど絶望だ。この稻を刈取つて見たところで、もちろん副業の材料にはなりやうもなくせいぜい牛の飼料となる位で馬はとても食べさうもない。…この田圃の中にいま農民の姿はない。まるで手の下しようがないのだ。たゞ異様に目に映るのは點在する植付不能の田の上に五、六人づゝ婦人が集まつて、朝鮮特有の白、赤、黄、緑……と色とりどりの單色の服装で、手に手にホミ（農具の一種）を持つてせつせつと土くれを叩いてゐる。乾き切つた眞白な土からは濛々と白い埃が上つてゐる。これは明年の耕作に備へるためだと聽いて記者は目が痛くなった（31-32 ページ）。

「この夏此庭から東方の大白山では猿や鹿などの野獸が旱天のため無數に斃死してゐました。それもさんざ彷徨した揚句、僅かな濕氣が滲み出てる谷間の岩を起こして必死となつて水を求めたらしく、岩の間に首を突込んだまゝ死んでゐるのです。この姿はとても正視出来なかつたですよ」と平澤郡守は語つた。しかし半島農民はこの災害を受け乍ら決して明日への希望を失つてゐない。土といふ意義を持たなくなつたこの白土の上に、新しい生命を吹き込むために戦つてゐるのだ。土に生まれ、土に生きる農民の心は内地の篤農と決して變わつてゐない。いま首を突込んだ農家は、家族四人で主人は愛國班の道路工事に出て留守、妻と十一、二歳の女兒、八つか九つ位の男兒の三人で一坪許りの土間で夢中に^{かます} 吠を織つてゐる。男の子は器用な手つきで細かい編み繩を綯つてゐるが、内地の農村の大人も及びさうもない位技も上手だし、たゞもう懸命な仕事ぶりだ（35-36 ページ）。

忠清南道牙山郡南一面の丘に立つ、此處は日清戦争で有名な牙山の古戦場だが、いま見る白ちやけた荒涼の風景は恐らく激戦直後よりも荒んでゐるに違ひない、たゞ記者がホツとしたのはこの忠清に入る道で五、六匹の犬の姿を見たことだ。忠清南道は稻の植付完了が六割五分、全然不能のものの三割五分植付けても枯死したのが一割五分と聞くが、この記者の目に映ずる一望は視野の届く限り旱害激甚の荒野に過ぎない。この部落に廉學根といふ一農夫が田植の時季に病臥の身となつてたまたま降雨があつたにも拘わらず仕事に出ることが出来なかつた。これを見た精動聯盟では理事長以下十八名が僅かな暇を見出した月明の夜に勤勞奉仕として辛ふじて田植を終つた。しかしこの涙ぐましい佳話にも容赦ない旱天は、相互扶助の精神でやつと青田と化したこの田圃をも忽ち赭く灼いて仕舞つたのである（37-38 ページ）。

闘ふ半島農民

山野光雄はこの一九三九年の朝鮮大旱魃について李太王十三年の大旱害（一九一〇年：日韓併合の年）の三倍にも達する大旱魃であったと報告しており、当時の農民の様子を「闘ふ半島農民」の見出しの下、「戦ふ銃後の一翼として半島農民の蹶起する機会もここに訪れたのである」と述べている⁶。

半島農民の活躍は、部落の隣保組織「愛國班」が中心となつてゐる。愛國班は全島を一つにして各道に「道聯盟」、各郡に「郡聯盟」があり、その下に各部落の愛國班があつて隣保共助の心に結び一連の火の玉となつて時難克服に邁進しつつある。永い間半島には春窮期と稱へ、毎年春先になると各家庭の食糧は極めて窮乏し、山菜類を摘むなどいはゆる草根木皮を頼りとする生活もあつた。若し一朝凶作にでもなると、内地にも例があるやうに犠牲者を出すことが稀ではなかつた。併し今この愛國班の勤勞主義によつて一ヶ年の労働日数も増加し、盛んな副業と共に生活が向上し、一意内地を助けて増産への逞しい進軍を續けるのである（28 ページ）。

翌年には半島農業報國青年隊が組織され、以下のような活動を行ったことが報告されている。

十七歳から廿五歳まで位の若き青年で組織する半島農業報國青年隊が誕生したのは昭和十五年であつた。青年隊は各道にある農民道場の修了生や農業補習學校の卒業生で、部落に歸つてその中堅として活躍してある青年から選抜し、第一回の昭和十五年には百廿五名を九州地方に送つた。漸く農繁期に入る頃、内地に着いた青年たちは應召家族で人手不足に困つてゐる農家に一人づつ寄宿し、家族の一員として獻身的な勤勞奉仕を行つたが、この奉仕の一ヶ月に青年たちは内鮮一體の精神を昂揚し、内地の優れた農法をも研鑽して立派に歸郷の土産を作つた。規律も正しく、勤勉でただ黙々と働く青年たちへ、手助けを受けた應召家族の感激も深く、青年を教え導く美しい情景も随所に描かれたのである（28-29 ページ）。

さらに『食糧戦物語』には、半島青年たちが東条首相を官邸に訪問したエピソードが収録されている。首相は「諸君は長途の旅に引き続き奉仕作業を行つたが、頗る元気の様子で喜びに耐えない。朝鮮全道より簡拔せられ、内地農村に赴かれた諸君は、將來朝鮮農村の中堅として貴重な體驗を得られたのである。この體驗を活かして一人一人が土の戦士として共榮圈確立と大東亞戦争完遂に邁進せられたい」と述べ、それに対して青年たちは「感激と決意を披瀝し、

⁶ 註 2 参照 27-41 ページ

併せて十九年より実施される徴兵制度への喜びを述べて官邸を去った」と書かれている（29-30ページ）。

船出

上記の感懷は、もちろん山野の目から見た所見であって、朝鮮民衆の魂の声を代弁しているとは言いがたい。未曾有の大旱魃の中、自分たちの家庭を差し置いて玄界灘を渡り、宗主国における農作業を手伝わされた若者たちの心中は、如何ばかりであったろうか。脇道に逸れるようであるが、朝鮮大旱魃の翌年に出版された金素雲による『譯詩集 乳色の雲』（一九四〇、河出書房）に収録されている「船出」という詩を掲げておく。作者の朴龍喆は、このときすでに亡くなっていたが、私には、この詩が、彼らの思いを代弁しているように思われてならないのである。

いざさらば　さらばよ
わがかゝる若さいのちを
泣きぬれて　あだにやるべき
いざさらば　さらばよ。

ふりきるによしなしや
靄のごと潤む瞳に港は見ゆる、
かのこうち小路　かの家並　などて忘れむ
小皺さへ目になつかしき　あゝかの人ら。

去りゆけど　のこるみれんの
追はれゆくひとの思ひといづれなる、
かへりみる雲にも風は搦むなり
いかり碇　置くあすの港の　ありやなしや。

いざさらば　さらばよ
わがかゝる若さいのちを
涙もて　あだにやるべき
いざさらば　さらばよ。

なお、この詩集には佐藤春夫が序文を寄せており、「正に廢滅せんとする言葉を以てその民の最後の歌をうたひ上げたといふやうな特別な事情が、かくも我々に訴へるところが深いのであろうか」と書いている⁷。しかし、言葉のリアリティを失いつつあったのは、むしろ日本の詩壇の方だったのではないかと私には思われる。

戦時食糧報国運動推進班報告会

政府は朝鮮大旱魃によって深刻化した食糧事情に鑑み、一九四〇年（昭和十五年）六月二十四日および七月一日、総理大臣官邸において戦時食糧報国運動推進班報告会を開催した。報告を行ったのは、佐藤寛次博士、石黒忠篤、千石興太郎、酒井伯爵、山脇延吉、河原田稼吉、中村海軍大將、後藤文夫、香坂昌康、田澤義輔などである。彼らは全国二十カ所の農村の現状と課題について、総理大臣以下の為政者たちにコンコンと説き聞かせたのであるが、このときの様子を、吉植庄亮は『お米談義』⁸の中で以下のように評価している。

精動運動⁹は内地で眠り通しであつて、僅かに朝鮮半島に於ける、昨年の旱害対策樹立にあたり、光ある運動と賞賛せられたに止まるやに、取り沙汰せられてゐた。が、どうして、どうして、全農村の聲を政治の中心に、二日がかりで吹込み、親爺教育をしたこの働こそは、一切を償つて餘りありと信ずる。米の問題が、食糧の問題が、農村問題が、戦争そのものと同じレベルに於かるる今日に於てをやである（191 ページ）。

この会議の直後、石黒忠篤は那須皓、橋本傳左衛門、小平権一などとともに新京で行われた日満農政研究会に出席し、内原満蒙開拓青少年義勇軍訓練所の満洲分場ともいうべき二龍山農場を見学したのだが、呼び戻されて帰国した後、第二次近衛内閣に農林大臣として入閣した。そして九月三〇日の閣議で直ちに「昭和十六年度米穀対策要綱」を決め、米穀の国家管理を実現させたのである¹⁰。ちなみに小平権一は自他共に認めるクリスチャンであった。

外米輸入

五年前（一九三四年：昭和九年）の春、米価の暴落を防ぐために朝鮮米・台湾米の移入調整を行った石黒忠篤当人が、今般の朝鮮大旱魃にあたって、逆に外米輸入に奔走することになったのは皮肉な出来事であった。石黒自身が語った苦労話を聞いてみよう。

⁷ 『朝鮮詩集』、金素雲訳編、1954、岩波書店 226 ページ

⁸ 『お米談義』（吉植庄亮、1942、實業之日本社）

⁹ 第一次近衛内閣が 1937 年 9 月から行った「国民精神総動員」のこと。国家のために自己を犠牲にして尽くす国民の精神（滅私奉公）を推進した運動。

¹⁰ 註 3 参照 260・267 ページ

十四年度十五年度は幸にして非常に巨額の外國米を佛印、泰、英領印度から輸入をしたのであります。併しながら之を輸入するに當たつて幾多の困難を我々は經來つたのであります。先づ之を買ふ爲に、如何に之を安く手に入れるかといふことに努力しなければならぬ。巨額なる外米を買ふ爲には何億といふ金の塊を外國に拂はなければならぬ。其の金は今彈丸を買ひ鐵を買はなければならぬ。其の金を割いて米を買ふのに廻さなければならぬといふやうな、誠に身を切られるやうな困難があるのであります。幸にそれは商業者諸君の國家に協力して貰つた努力に依つて買い上げ得たのでありますけれども、それを持つて來る爲に、取りに行く船を廻すのにまた非常な困難があるのであります。今日物資の供給が動もすれば圓滑を缺くといふやうなことは、戦争の爲に大陸に向かひ或は南方に向かふ所の船の遣り繰りに如何に困難をして居るか、戦争必需物資を持つて來るためにどの位の困難をして居るかといふことは推察に難くないのでありますが、其の上に尚ほ食糧をも多量に載せて持つて來るやうな船の遣り廻しをしなくちやならぬ。それも國民の食糧問題として管船當局は非常な都合を付けてやつてくれたのであります。併し其の遣り繰りが付て船積みに出掛けた時に、若しもそれ等の外國米供出の港に於て、之を積み込む苦力の元締をして居る所の、永年力を養ひ來つた支那の華僑の親玉が、首を横に振つてストライキをさしたならば一俵の米も船に積むことが出来ない。南洋の華僑はご承知の通り蒋介石援助の色彩の強い者であります。故に私共局にありました時代、米の買上が出來た、支拂の金も送ることが出來た、船も廻した、にも拘わらず安心は出来ない。船に積み込んだといふ時に於て、始めてそれならば何晝夜かゝつて其の船は内地に着く、故に此處に持つて居る米を順次に配給に繰出して宜しい。斯ういふ計畫が立つことになるのであります。そこまで來なければ買つた米も些つとも安心が出来ないといふのが外米取引の現状であります¹¹。

食糧新構想

このような事態に立ち至つて、大東亜共栄圏全域における食糧増産が叫ばれると同時に、消費の削減、さらには様々な新構想がまことしやかに語られるようになったのは当然の成り行きだったといえよう。食糧増産に関しては後に譲ることとして、当時の学者たちによる新構想のいくつかを、引き続き山野光雄の本¹²から紹介してみたい。

アク抜き法：昭和十六年九月東京農大教授住江金之博士は、甘藷の葉アク抜き法を發表した。博士の考案によれば一萬分の五乃至千分の一の曹達液か灰の溶液に浸して煮立てるだけで、充分アクが抜け處理出来る。そして栄養價は乾葉百匁で白米約二合に相當するカロリーを含み、其内の蛋白質は牛肉百廿匁に相當する。また利用方法は米一升到二百匁の乾葉を混入すれば約五匁の節米が出來、蔬菜代用にはお

¹¹ 註 1 参照 123-124 ページ

¹² 註 2 参照

ひたし、佃煮漬物となる。これで従来堆肥が^{ママ}、家畜の肥料としてのみ使用されてみた甘藷の葉や莖が立派に戦時食糧として役立つことになった（290-291 ページ）。

草の利用：小野武夫博士の報告によると、二毛作の出来ない東北地方などでは麥類を水田に蒔きつけ、これを田植畝の妨げの^{ママ}ならぬやう出穂後間もなく刈り取って乾燥し、それを粉末にしてパン粉やうどん粉の代用に使用する。また米に對する執着を幾分でも捨てて、草パンとか草うどんとか、草團子とかを食べれば食糧問題は多分に緩和されるとある（290 ページ）。

醫學博士二木謙三の玄米食論：玄米食の主眼は米の生命力といふことである。生命力は體力や腕力とは違ふ。體力があつても生命力のないものは死亡する。體力は死んだ肉からでも攝れるが生命力は生きたものからではなくては攝れない。生命力を抜きにして體力だけ論ずるのが栄養のカロリー説であるが、國民食糧としてはどうしても玄米のやうな生命力のある食物でなければならない（279-280 ページ）。

蛹油：蠶の蛹から出る食用油はすでに國民の常識となった。發足した帝國油糧統制會社はこの蛹油をも含めた配給統制機關である。蠶業の國日本には幸運にも手近にしかも大量にこの資源が轉がつてゐたのである。蛹の中に三十パーセントに近い脂肪があり、大豆の含油量十七・八パーセントに比べて立派な油脂原料であることは早くから認められてゐたが、問題はその臭氣であつた。しかし昭和十四年農林省蠶糸試験場でこの脱臭に成功、以來これが工業化は着々進み、蠶糸利用開發會社、片倉製糸紡績など大きな搾油工場だけでも六七十に達してゐる（288-289 ページ）。

ドングリ製品：昭和十六年秋、閣議は酒造米の四十萬石減石から酒税法を改正して焼酎の原料として、どんぐり椎、榎の實、栃、蘇鐵の實や北海道地方の原野に生長する菊芋を公認した（286-287 ページ）。

この他に、江戸時代の飢饉食についても以下のような紹介がある。

儉約團子餅：ふすま五升、大豆二升、米の粉糠五升到粟か米の粉三、四分を混ぜ合わせ一度石臼で細かい粉にしてから、ごぼうの葉など粘り氣のある草を入れて餅につく。この量で十三、四人の家内では二回分の食事これを大根葉など入れた團子汁にすると三回分の食事に當る（262 ページ）。

糍（しいな）粥：米の糍の中へ粉糠、稗、大豆、その他大根、干葉、青物などを入れたもの、大豆は前の晩から水につけておいて粥に入れる（262 ページ）。

藁餅：生の藁を半日ほど水に浸し、よく砂を洗ひ落として穂を取去り、根元の方から細かに刻んで蒸して乾し上げ又は炒つて引臼で細かい粉に引く、これを一升到米の粉二合を入れて捏ね合はせて餅のやうにし、蒸すか茹でて鹽、味噌などで食べる（262 ページ）。

松の皮の餅：松の荒い上皮を除いてその下の生皮（白い部分）を取り臼で搗き碎き水に浸して密閉して一夜ほど放置すると苦みや悪臭が消えて布で漉すと粉が出来る。これに米や麥の粉を少し混ぜて餅につく、また香煎にする（263 ページ）。

まるで稲作が渡来する以前の狩猟・採集時代の縄文レシピに回帰しているかのような印象だが、名にし負う「瑞穂の国」の大和民族としてはさぞかし惨めだったはずである。農林省食糧管理局長官であった湯河元威は次のように述べている。「昭和十六年度米作の収穫豫想がついた頃、我々食糧行政の関係者には人知れぬ悩みがあつた。…我々の偽らぬ氣持を云へば、早く戦争になつてくれゝばよいと、念じた位である」¹³。すでに四年以上も日中戦争を戦っているが、「早く戦争になつてくれゝばよい」などと念ずるのはおかしい話であるが、いずれにせよ、すでに抜き差しならない状況になっていた「食糧戦争」の方が、武力戦争による解決を要請したというのが当時の偽らぬ雰囲気だったのである。

肥料事情

さて、食糧事情の次に、肥料事情についても一瞥しておこう。「根深葉茂：（根深くして葉茂る）」の格言通り、食糧増産を担う農業の根本は、地上部の繁栄を支えるための充実した根作りを行うことにあり、肥料事情は、食糧事情に直結する最重要事項の一つであった。

麻生慶次郎によれば、日本の単位耕地面積あたりの購入肥料の使用量は、一九二八年（昭和三年）の段階で、窒素肥料は世界最高、リン酸肥料はオランダに次ぎ世界第二位、カリ肥料は世界第四位であったという¹⁴。当時、農家経費の約四割が肥料の購入に充てられていたことを考慮すると、日本の農民が如何に「根作り」や「土作り」を重視するようになっていたかが理解できる。同時に、このような化成肥料の多投入は、肥料会社そのものとともに、肥料を作るために必要な電力を供給する会社の成長を促し、水俣病で有名なチッソや福島原発事故で有名な東電などの巨大企業を生み出すことにも繋がった。農業の近代化は、農民がアグリビジネスに包摂されていくプロセスであったともいえるのである。

太平洋戦争が始まる数年前の日本の肥料事情は以下のようなようであった¹⁵。

¹³ 註 4 参照 序 1 ページ

¹⁴ 『土壌と肥料』、麻生慶次郎、1943、日本評論社 281 ページ

¹⁵ 「戦時下農業雑感」、佐藤寛次、1944 年 4 月、『教育農藝』 23-24 ページ

日本農業に於ける増産の條件として最も重要な一因子は肥料であるが、金肥及自給肥料を通じて、共に著しく減縮せられてゐる。金肥は輸移入途絶、原料不足及製造能力の變更に伴ひ、戦前の基準を維持し難いことは戦時の常として已むを得ないが、日に日に配給量の減退するのを見るのである。而して其の原因は一様ではないが、先づ加里肥料中硫酸加里類は獨逸の産であるが、輸送路途絶して居り、鹽化加里は敵米國及ソ聯の産であり來る筈はない。磷酸肥料は其の原鑛の多くを敵國に仰ぎ、若しくは交戦地域に求め居りたる關係上運船腹の問題と相交錯して製造能力を發揮し得ない。天然肥料中最も重要なものは国内産の魚肥であるが、漁場の變動、漁船の徴發、油の減配等に依りて漁獲高減少したる上に如何なる魚類も食膳に上るといふ食品界の異變に依つて、魚肥の製造高に激減を見てゐるのである。大豆粒は滿洲に於ける大豆生産の減退及輸送に難加へて、醬油、味噌製造の原料増大に依りて著減せしめて居る。都市附近の主要肥料たる糞尿はガソリン配給と配車の縮減に依つてその使用高を著しく制限せしめる等從來の方法による限り、肥料を從來の如くに消費することは不可能になつたのである。是に於て結局自給肥料の増産が唯一の道であり、最終の目標になるのであるが、自給勞力の不足は草刈、木葉集等に支障を來し、都會の非農業者、學徒の勤勞奉仕などに依る堆肥原料の蒐集位では、到底肥料配給の不足を補ふに足らないのである。

このような如何ともしがたい肥料不足の中で、石黒忠篤は農民たちに以下のような檄を飛ばしている¹⁶。

肥料の供給數量が又減じた。人手も足りない。而も國家は無理な増産を要求する。是以上出来ないといふて諸君が鋤から手を離して、手を上げたならば、増産は出来ないと同時に國は滅びなければならない。戦争は大陸の彼方でなくて此の場合諸君の鋤の前にある。此の戦線を突破し、此の困難に打ち勝つて國を伸展せしむる爲には、どんな無理があつてもやり通さなければ勝てないのであります。

戦といふものはどの道無理をせずに勝てるものでありませぬ。無理を押し通してやり遂げることが即ち勝ちになるのであります。不可能な事を不可能として抛げてしまへば負け、不可能でもやり遂げなければ承知をしないと云つてやり遂げれば勝ち。問題ははつきり此處に懸かつて居るのであります。

「食糧戦争」と農業報国連盟

石黒忠篤の農政については『石黒忠篤の農政思想』¹⁷に詳しいが、私見を述べさせていただくと、石黒忠篤は農政にはちがいないが「食糧戦争」をやっていたのである。それゆえに、こ

¹⁶ 『皇国農民の道』、1942年3月、農業報國聯盟 131-132 ページ

れから述べる食糧増産報国推進隊、食糧増産報国推進隊嚮導隊、食糧増産隊（少年農兵隊）、満洲報国農場隊などは、すべて軍隊と同様に大隊・中隊・小隊・別働隊などからなる隊組織という形態を取っており、内原の満蒙開拓青少年義勇軍訓練所における中央訓練と各府県の修練農場における地方訓練は、さながら軍隊教育ともいうべきものであった。軍人勅諭や戦陣訓に相当する綱領も存在している。

例えば、食糧増産隊綱領は以下のようなものである¹⁸。

我等ハ皇國ノ少年農兵ナリ
天祖ノ神勅ヲ奉シ
國ノ本タル農道ニ追進シ
身命ヲ捧ゲテ土地改良食糧増産ヲ達成シ
永ク農業ヲ以テ家ヲ繼ギ國ニ報ヒ
期シテ
聖慮ヲ安シ奉ラム

石黒忠篤が理事長を務めた農業報国連盟は、さしづめ「食糧戦争」遂行のための参謀本部であった。石原治良の解説¹⁹がすぐれているので、下記に引用しておきたい。後日、この農業報国連盟とそれを改称した農業報国会は、満洲報国農場の主たる経営主体となっていく。

農業報国連盟は、農林省の外郭団体であったが、極めて変則的な性格・形態・機構であって、経費は総て全額国庫補助で農林省から交付されたが、法人格を有せず、総会または評議員（会）の如き議決機関もなく、幹事もなく、構成員は大部分農林省官吏の兼務で、事務所も農林省庁舎内にあって、いわば農林省（特に経営課）の二枚看板的存在であった。はじめ総裁は農林大臣であったが、昭和十六年十月規約を改正し大臣を辞めた民間人石黒忠篤が理事長になり、昭和十九年五月の規約改正で農業報国会と改称、会長に石黒忠篤、理事長に農林省局長を退官して民間にあった田中長茂氏を充てた。民間人としては少数の専任事務員と財団法人農村更生協会職員若干名が兼務しているだけであって、事業の企画・実施等の殆ど全部を農林省官吏の兼務する連盟幹事が担当掌理した。

この形は都道府県に於ても同様で、各都道府県には農業報国連盟支部が置かれ、その経費は農林省から連盟本部を通じて全額補助されたが、知事が支部長、農林部長が副支部長、経済更正主管課長が幹事

¹⁷ 『石黒忠篤の農政思想』、大竹啓介編著、1984、農文協

¹⁸ 「食糧増産隊綱領に就て」、石黒忠篤、1944年11月、『村と農政』 2・17 ページ。この綱領は石黒忠篤、加藤完治、寛克彦によって作られた。

¹⁹ 『古稀・金婚記念治良職歴五十年』、石原治良、1992、図書印刷 55・57 ページ

で、事務所は同課内におき、支部の事務事案は総て経済更正主任官及びその部下県職員が行った。全く県の二枚看板であった。

当時は、官選知事、中央集権制度であり、都道府県の経済更正主任官は地方農林技師または地方農林主事で、農林省が人事権を持ち各県に配置していた関係で、農林本省の技師兼連盟官吏から府県の経済更正主任官兼連盟支部員に対し指示すれば、打てば響くが如く直ちに行われ、中央地方一体になり、中央の思うがままに地方で事業が統率的・効果的に行われた。この状態は地方自治制の今日では到底想像もつかないことであった。

最初、私には上記に解説されている農業報国連盟の存在意義がよく分からなかったのであるが、農林省と農業報国連盟の共催で行われた後述する食糧増産報国推進隊中央訓練でなされた石黒の演説に接した時、思い当たることがあった。彼は「(北支) 事變始まってから四年半の歳月の間に、内閣の迭る(註：更迭される) ことが何回になって居るか、内閣の迭ること七回、國民は中央政府内閣が誰であっても宜しいが、長く確かりやうて貰ひたいといふことを切望せざる者はない」²⁰と述べており、行政機構が変わっても変わらざる仕組みが必要であると考え、自分の息の掛かった農林省官吏たちを農業報国連盟に兼務させ、自ら理事長に就任したのである。つまり、政治が変わっても、「食糧戦争」をやりぬくための農林省のダミー組織を作り、自ら統帥権を握ったというわけである。石黒による「食糧戦争」推進の駆動力となったのは、参謀本部としての農業報国連盟、実動部隊としての食糧増産報国推進隊、食糧増産報国推進隊嚮導隊、食糧増産隊(少年農兵隊)、満洲報国農場隊、そして、これらの隊組織を訓練するための施設として、中央訓練が行われた内原の満蒙開拓青少年義勇軍訓練所、および地方訓練が行われた各府県の修練道場を挙げることができる。以下、順次見ていくことにしよう。

食糧増産報国推進隊中央訓練

石黒は、食糧事情や肥料事情などについて直接農民と対話しながら「食糧戦争」を支える精動運動²¹を展開していくための新たな方針を打ち立て、一万五千人の農民を内原の満蒙開拓青少年義勇軍訓練所に集め、第一回食糧増産報国推進隊中央訓練を行った。その経緯を石原治良の解説によって辿ってみよう²²。

我國の食糧事情は、事變当初の一、二年は比較的餘裕があり、政府も國民も食糧問題に對して樂觀的であつた。然しながら實際には事變勃發以來、毎米穀年度の繰越米は漸減し、次第に需給關係が逼迫を

²⁰ 『皇国農民の道』、1942年3月、農業報國聯盟 104-105 ページ

²¹ 註9参照。

²² 『農事訓練と隊組織による食糧増産』(石原治良、1949、農業技術協會 9-11 ページ)

加へて來てゐた。戦争が始まれば戦時資材の大量生産、軍需工業の擴張等によつて、労働の強化集中となり、或は軍用食糧の蓄積等のため、平時より食糧需要が多量に増す。日本に於ては四年間に亙る事變でかくの如き事情が現はれ、その上特別なる事情として、昭和十四年度に朝鮮の大旱魃があつた。即ち朝鮮米一千萬石減収といふ事實である。従來朝鮮から少なくとも八百萬石、多い時は九百五十萬石も内地に入つてゐた米が、この年には二百萬石にも足らぬといふ状態であつた。これがために、貴重なる金貨を出して外米約一千萬石を入れ、辛うじて危機を切り抜けたのであるが、當時未だ米穀の管理制度は布かれてゐなかつた。従つて一千萬石の朝鮮米減収が事實であると世人に印象づけられた頃には、すばしこい者は食糧の買漁りを行ひ、大商人は資力にまかせて思惑買をやり、また農民の中には賣惜しりする者もあつて、このため出来秋にも拘わらず東京大阪等における米の出回りは非常に減少し、如何なる事態が発生するや計り知れないといふ現象を來した。…日華事變を一方でやりながらかくの如き食糧事情では寒心にたへないといふので政府は遂に食糧管理制度を布いたのである。即ち農家の自家保有米制度が布かれ消費者には消費量の割當制度が行はれた。

かくの如く、昭和十四年秋を契機として、食糧事情は急激に悪化したので、政府は食糧の増産割當、作付統制、作付轉換等の増産施策を実施すると共に、事變の擴大長期化に伴ひ、農業勞力資材肥料等の不足亦深刻を加へて來たので、これらに對する統制を次々で行ふこととなり、それらの政策遂行に農民の理解と協力を強く要請するに至つた。

然るに従來永く自由經濟に馴れ、私經營に任せられてきた農民にとつて、農業經營を遽やかに統制諸政策に合致するやうに切換へることは容易でなかつた。而も農村本來の性格たる現状維持的保守性の然らしめるところとして、また農業の特質上機動性に缺けてゐる關係からして、殊に農民の間には、國情の理解、例へば食糧の逼迫してゐる實情や、増産を強制しながら肥料や資材等を満足に供給し得ざる事情等について理解が十分でないため、政府の行ふ施策、國家の農民に對する要請を精神的に受け入れて協力實踐する熱意に乏しく、却つて農民は懷疑と混迷の裡に彷徨するの觀があつた。

かくの情勢の只中、昭和十五年七月十七日、大命降下して第三次近衛内閣が組織され、石黒忠篤氏は農林大臣として臺閣に列した。

石黒農相は就任とともに多年に亙る豊富な農政上の經驗と、該博なる識見と、深奥熱烈なる農本主義思想とを以て、這般の情勢を深く洞察した結果、重要農林政策の一として全国農村から中堅人物を大量に集め、農林省が直接これを訓練することを發案提唱された。

一万五千人という人数の根拠は、全国の主要農村七千五百町村から平均二名という計算であつた²³。この訓練が如何に困難を伴うものであつたか、その裏事情を小平権一の文章から見ておきたい²⁴。

²³ 註 9 参照 13 ページ

忠篤は、農林大臣に就任すると、日ならずして竹山祐太郎を呼びつけ、二万人の農民を茨城県の内原に集める計画を立てろと命じた。当時、内原には国民高等学校があり、加藤完治が校長をつとめていた。なおここには昭和十四年、満蒙開拓青少年義勇軍訓練所がおかれていた。竹山の計画ができ上がったのは、その年の暮れに近かったが、戦局がかなり緊迫の度を加え、輸送機関が足りず、大騒ぎの最中だった。二万人というと、たいへんな人数である。果たして、忠篤の命令通り集められるかどうか、竹山は内原の江坂彌太郎に相談した。収容する場所は何とかなるが、問題は輸送力だという。この計画というのが、農業増産推進隊の問題で、忠篤が、大臣就任の条件として持ち出したことなのである。

竹山は、意を決して、鉄道省の事務次官のところへ出かけ、農林省の計画を説明し、内原に二万人の農民を集める輸送計画を立ててくれと、強硬に申入れた。ところが次官は、呆気にとられ、「いまの輸送状況が、どれほど逼迫しているか、知らぬはずはあるまい。冗談はやめにしろ」と全然とり合わない。「そんなことは百も承知の上だ。重大な時期だからこそやるのだから、何としても工夫してみてください」と竹山は食い下がった。鉄道次官のところまで出かけて、子供のつかいで戻るわけにはいかぬと、竹山は腹を据えて、相手を睨みつけた。

竹山の剣幕におどろいた次官は、背後には必ず一人物が目を光らしていると想像して、「一体、君がそんなに頑張るのは、だれにいわれてきたのだ」と探ぐりを入れてみた。待ってましたとばかり竹山は、「石黒農林大臣です。大臣がボクに計画を立てろというからきたんだ」と胸を張っていった。さすがに次官は、「石黒さんなら、いい出したら後に引かぬことは分かっている。何とか計画を立ててみよう」と、言下に引き受けてくれた。

こうして、内原における農業増産推進隊の計画が緒についたのである。この計画の狙いは、どこにあったかという、戦争は、いよいよ激しさを加えてきたが、農民の頭は、容易には現実の事態に切り替えることが困難であるから、これを切り替えるのだということにあった。食糧の増産をしろ、供出をしろという、農民はすぐ、一体、肥料はどうしてくれるのだといい出し、農民側の反駁が強くて、農林省のいい分に耳をかしてくれない。戦争中だから、肥料だって満足にあるはずがない。忠篤は、こうした実情を見抜いていたのである。おれは、農民に直接に訴えよう、そのためには、食糧増産推進隊をつくり、自ら農民に接して、戦時下の食糧確保のために、農民に人肌ぬいでもらう、というのが忠篤の気持だった。

当時、このような非常手段は、何人も思いつかなかったし、たと思いついたとしても、実行できる人は一人もいなかった。今の時代とちがって、農林大臣という権限は、世間から畏怖されてもいたが、いきなり何万人という農民を集めて、大臣がいうことだから、承知してほしいといったところで、素直に聞き入れられるような、生易しい時代の空気ではなかった。

²⁴ 『石黒忠篤』、小平権一、1962、時事通信社 113-116 ページ

それを思いきって忠篤は、農林大臣に就任した最初の仕事はこれだといいきり、ほかの仕事は、全部、次官の井野碩哉にまかせて、推進隊の仕事に取り組んだ。直接に農民に訴えれば、彼等は必ず分かってくれるにちがいないと、忠篤は信じていた。内原は急に忙しくなった。日の丸哨舎の急造が、夜を日について強行された。口では簡単に一万五千とか二万といっても、この人員を一ヶ月食わせなければならぬのである。ホウキ一本、シャモジ一本の果てまで用意しないと、人間の日常生活ができないのだから容易ではない。

常磐線は単線だし、内原というと寒駅にすぎない。そこへ全国から一定期日に、大多数の人間を集結させることだけでも大変である。講義をやるかわら訓練もする。また、日常生活が共同である。この仕事にたずさわった農林省の官吏も命がけだったろうが、忠篤の信念が農民に通じ、また、実行する中心に加藤完治が立っていたということが、実現させた原動力だった。実に、石黒忠篤と加藤完治という二人の役者のイキが、ぴったりと、水も漏らさぬように合っていたのである。

食糧増産報国推進隊中央訓練と地方訓練は如何に行われたか

この食糧増産方向推進隊第一回中央訓練に参加したのは、西垣喜代次によれば「農業増産に精勵しつゝある農村中堅人物にして、換言すれば國本を培ふ適正經營農家たるもの、町村又は部落に於て推進力のある年齢即ち二十五以上四十五以下の男子で、心身健全にして約一ヶ月の集団訓練に耐へ得る者、禁酒をなし節度ある生活に服し得る等の諸條件を具備した者であつて、地方長官の推薦を得たるものである。農民の代表者にしてその中でも粒選りの者であつたことは第一回以来當然であつて、特に注目すべき現象は隊員の約二割五分乃至三割程度が戦火の洗禮を受けたる歸還勇士であつたことで、この運動の將來に大きな意義を持つもの」であつた²⁵。西垣は、あたかも個人の自由意志で応募したかのごとく書いているが、農業報国連盟が各府県知事を通して管内市町村に二名の中堅農家の選出を割り当てた結果であることはいふまでもない。なお「編成はすべて軍隊式に大隊、中隊、小隊に分ち、全國道府縣を三乃至四に分割したるものを一ヶ大隊とし、第一回及第二回は前後二期の關係上四ヶ大隊とし第三回は三ヶ大隊編成とした。中隊は道府縣単位とし、小隊は約五〇名を以て組織したるものにして、その幹部には農民の鍊成に經驗を有する者即ち修鍊農場長又は職員、道府縣經濟更正職員等、回を重ねる毎に、前期推進隊員中よりも選擇することを標準としたのである」²⁶。また別働隊も編成され、「平生鋤を持つ代りにペンや算盤を持つて、農業といふ自然に親しむ天賦の職業を事務の面を通じて精勵してゐる農林省の若手中堅官吏、農林關係の中央團體の若手職員、又近時自局の要請にて設立されたる農業關係中央統制會社の中堅社員等に依り結成されたる一軍で、全國農民

²⁵ 『修鍊農場』西垣喜代次、1944、汎洋社 90-91 ページ

²⁶ 註 25 参照。91-92 ページ

の隊伍に溶け込み、自分自身の錬磨は勿論、親しく地方事情や農村實情に接觸、農民心理の體得等を爲しつつ、一ヶ月間火と燃ゆる農魂の磨き合ひを體驗する爲に入所したのである」²⁷。

訓練内容は以下の通りである²⁸。

幹部、隊員一體となり起床、日課、就寢に至る迄一切集團訓練に依り之を行ふものにして訓練期間一ヶ月を大約三期に分ち第一期は基礎的の訓練、第二期は現下國情の理解認識、最後の第三期は實踐活動目標の確立に重點を置くこととした。そしてその訓練方法は左の内容に依り實施し、行事は一切内原義勇軍に準ずるものとした。

- (イ) 行事一朝夕ノ禮拜、^{やまとぼたらき}日本體操、駆足等
- (ロ) 武道一直心影法定ノ型、柔劍道等
- (二) 訓話及講話
- (ホ) 研究座談會
- (ヘ) 體驗發表

訓話や講話の講師としては、内閣総理大臣を筆頭に、陸海軍当局、外務大臣、農林大臣などが担当し、いわば、権威を振りかざした洗脳教育が行われたといつてよいであろう。農林大臣石黒忠篤の訓話と加藤完治による連続講話は『皇国農民の道』として纏められている²⁹。これらの講話は、晴天の場合は全員を本部前広場に集結して行い、雨天夜間は二百数十棟に上る全宿舎に設置された拡声器を通して聴講させた³⁰。このような中央訓練は一九四〇年の第一回から一九四四年の第五回まで毎年行われたが、第五回は内原に集合することができず、地域別に短期訓練として実施された。また一九四三年に行われた第四回の中央訓練では、その年に閣議決定された「第二次食糧増産対策要綱」に従い、暗渠排水客土約四十万町歩、小用排水事業受益面積約六十万町歩を完遂することを目的に、内原における合同訓練を二十日に短縮し、残りの十日は中隊毎に地元の都道府県内の土地改良に従事した。千葉県の場合では、風呂や炊事に給水するために村の警防団が毎日午前三時から出動し、炊事要員の女性たちに至っては、毎日午前二時に出動したと報告されている³¹。

なお、第一回の訓練では「隊員の衛生については格段の注意を拂ひ、内原訓練所病院に於て検診、診察に當つたが、三名の死亡者を出した。主催者から弔慰金、葬祭料を贈り、全隊員か

²⁷ 註 25 参照。93-94 ページ

²⁸ 註 25 参照。94-95 ページ

²⁹ 註 1 参照。

³⁰ 註 22 参照。9-89 ページ

³¹ 註 22 参照。22 ページ

らも香奠が贈られ、全隊員参列鄭重な告別式を行ひ、遺骨は歸村後公葬とせられた」³²、第二回の訓練では「後期訓練に於て病死一名を出だした」³³、第三回の訓練では「本訓練期間中は、二回の小雨の外は晴天で、隊員の健康状態も良好であつたが、死亡者二名を出した」³⁴、第四回の訓練では「内原訓練期間中の受診患者は延べ二二六七名、一日平均受診百十四名で、概して健康は良好であつたが、内二名の病死者があつた」³⁵とあり、これらの訓練が如何に常軌を逸した狂気の沙汰であつたのかが伺われる。

中央訓練に参加できない中堅農民および選に漏れた過剰人員に対しては、中央訓練に即応する形で、地方訓練が行われた。二週間ほど、道府縣の修鍊農場などにおいて行われたのだが、中央訓練と違った特徴としては、隊員の倍加運動として位置づけられ、同志青壮年の量的増加を図ると共に、当該府県の中堅農家との結合が目指された³⁶。一部女子も含み、地方訓練修了員数は十万三千六百名に達している³⁷。

食糧増産報国推進隊嚮導隊の結成

食糧増産報国推進隊第一回中央訓練が終了した時、関係者の間に推進隊の中核隊を設けるべしとの議論が起こり、こうして翌年（一九四一年）結成されたのが食糧増産報国推進隊嚮導隊である³⁸。

推進隊員中から最も優秀な人物で、且つ自家の農業經營を家族の護りに任せて、長期間身を隊生活に投じ得る者を選抜し、基礎訓練の後、隊を組んで全国各地に機動させ、各地の農村事情に觸れ、或は先進地の農業を見學し、或は農民の先達先賢と謳はれた人々の遺業を偲び遺風に接し、推進隊員や地方中堅人物と相語り相磨き、これによつて一層高度の農業訓練を積みしめて、逞しい國本農家、嚮導農家たるの修業を徹底させると共に、推進隊員と相呼應して、食糧増産に精神的にも勞力的にも薄弱な地方に於て集團作業を行つて地方民の覺醒奮起を促し、増産の餘地が大きく残されてゐる地域に於て集團作業により一舉に生産力向上の實を擧げ、その活動を活模範として地方農民の増産意欲を奮起昂揚させ、その實踐により隊員の修行を益々深めしめることを目的とした推進隊の中核隊を設けることになり、昭和十六年度農林省並びに農業報國聯盟は、同聯盟の直轄隊として農業増産報國推進隊嚮導隊なるものを編成した。

³² 註 22 参照。28 ページ

³³ 註 22 参照。39 ページ

³⁴ 註 22 参照。44 ページ

³⁵ 註 22 参照。62 ページ

³⁶ 註 25 参照。98-99 ページ

³⁷ 註 22 参照。88 ページ

³⁸ 註 22 参照。90 ページ

要するに、食糧増産報国推進隊が本隊とすると、嚮導隊は遊撃隊あるいは機動隊である³⁹。一九四一年から一九四四年まで、毎年度一回一隊で、隊員数の合計は九四九名であった⁴⁰。嚮導隊は北は北海道の帯広から南は鹿児島に至る大部分の府県に出動し、開墾・水田造成・排水路の掘削改修・暗渠排水・溜池築堤・麦播するなど、多岐にわたる移動作業を行った。「太閤の一夜城」のようなものを想像されたい⁴¹。

食糧増産隊（少年農兵隊）

加藤完治は「大東亞戦争勃發以來、次第にあらゆる方面に人が要るやうになつて、農業方面にはその中心的人物が段々と缺けて來まして、今日に於ては、私共の眼から見ても、どうしてもこれからは日本の食糧問題を解決するに必要な勞力を擔つて立つ人々は農村の女子と國民學校の高等科の生徒および青年學校の生徒といふやうな若い人々であります。かういふ子供の勞力を活して日本の食糧問題を解決する、さうして日本の國民全體に必要な食糧を確保する以外に途がないと思ふのであります」⁴²と述べているが、太平洋戦争が進むにつれて農家戸数が漸減するとともに、農村の壮年や青少年が次々と軍需産業に轉移し、農村は老人と婦人と子どもを残すのみというような状態であった。こうして遂に年端もいかない少年たちが食糧増産隊として動員されることになったのである。少し長い引用になるが、再び、石原治良の説明を聞いてみよう⁴³。

戦争の擴大に伴つて農村からの應召が激増し、軍需工業の飛躍的膨張は農村勞力を極めて大量に吸収することゝなつた。或者は徴用せられ或者は高賃金を日當に自ら工場に奔る等離農者が相次ぎ、勢いの趨く所、食糧増産はおろか生産の維持さへも困難視され、農業勞力の不足缺乏は甚だ憂慮すべきものがあるに至つたので、新たに戦時農業要員指定制度を布き、從來の農業生産統制令による微力な離農統制と切り替へることゝしたが、今回の食糧増産隊擴充はそれと相關聯して農家の後繼者を農業に留むるための措置として重要な意義を持つものであつた。

即ち日華事變以來、我國農家戸数は絶對數を漸減し、しかもその内容に於て専業農家の急減、兼業農家の著増を來した。而して農村の壮年、青少年は滔々乎として軍需産業に轉移し、村には老人と婦人と子供を残すのみといった傾向が頗る著しくなつてきた。飛行機や軍需品の増産が必要だからといつて食糧増産確保ができなくなつてはならず兩者の間に適度の調整が圖られねばならなかつた。農村は單に食

³⁹ 「農業報國運動と食糧増産隊」、石黒忠篤、1944、『村と農政』第6巻第4号 8ページ

⁴⁰ 註25参照。71ページ

⁴¹ 註25参照。73ページ

⁴² 「農兵隊と農民魂」、加藤完治、1944、『村と農政』第6巻第11号 18ページ

⁴³ 註22参照。122・124ページ

糧の基地たるのみでなく、民族、人口培養の優れた源泉であつて、健全な農家を一定数保持育成することとは國家存立上絶対必要であるとの見地から、農林省と厚生省との間には當時常に激しい爭奪、論爭、交渉が續けられた。そして政府は戰時國民勞務動員計畫に於て、毎年度國民學校を卒業して就業する少年の中、男女各十六萬、計三十二萬人（この數は農業者の死亡等による減耗を漸く補充する數）を農業に留むべき者と定めてみたのであるが、事實はこの員數すらも農村に確保されない状態であり、之を留むべき組織もなく指導もなかつた。國民學校卒業以前、早きは八、九月頃から就業先が決定する。國民勤勞動員署等の強い勸奨引拔きと、陸海軍競爭での少年兵の強制割當が矢繼ぎ早に來る。卒業と同時に農村を去つて行く。次には卒業前から生徒兒童の通年動員の取扱ひで連れて行く。心ある農家は自家農業を今後如何にして維持していくかに悩み、村を思ふ人々は村の行末を憂へ、國民食糧の確保困難に焦慮した。

當時の少年たちの心理は、荒鷲となつて君國に殉ずる少年航空兵、少年戦車兵等となり、または航空機製造に挺身する産業戦士となることを誇りとし、第一等の忠義と觀じ、これに大きな憧れを持つてゐて、自家農業に留まることは少年にとつては極めて愧ずかしく肩身の狭い思ひがしてゐたのである。

この名譽心と工場より見せつけられる高賃金の魅惑に少年の心の動くところに積極的な少年兵の徵募、工場への徵用、勸誘が強く行はれたのであるから、心身に何らかの缺陷ある少年を残すのみといった村々も現はれる状態であつた。眞面目に農業を護り食糧増産に勵む經營主がその後繼者を農に留め農の修行をなさしめるについて思ひ煩ひ、たまに農に志す少年があつても、滔々たるこの風潮と強い勸誘には抗すべくもなかつた。

茲に食糧増産隊の編成を行ひ、農業に留むべき農家の後繼者を農業に確保し、農家個々の力を以てしては爲し得ざる作業にして、隊の出動により食糧増産上大いなる効果をあげ得る作業に挺身せしむる農業勞力補給の常備隊として貢獻せしめると共に、隊生活の全般に亙り全期間を通じて訓練の徹底を圖り、確固たる農民精神、尊農愛土の思想を植付け、晴耕雨讀による作業、學科によつて農業知識技術および普通學を習得せしめて、農に誇りを感じ、農に安んずる農家後繼者としての資質、實力を磨き養はせることを目的として實施されたのである。

食糧増産隊はいつしか俗稱して少年農兵隊とも呼ばれるやうになつた。そして増産隊の少年達は自分達は鋏の戦士であり、鋏の特攻隊で陸海軍少年兵と比べて遜色なきものであるとの誇りをもつて敢闘するやうになつたが、當時の情勢上少年達にかゝる誇りをもつて食糧増産に向はしめるやうに仕向けることも食糧増産隊を計畫する一つの狙ひであつたと認められる。

一九四三年には各府県から数十名ずつ隊を編成して全国四〇〇〇名の食糧増産隊ができあがり、それぞれ県内における土地改良や農耕作業に出動した⁴⁴。さらに一九四四年四月には新たに

⁴⁴ 「青少年農兵隊に就て」、1944、『村と農政』第6巻第4号 20-26 ページ

全国三万人の甲種食糧増産隊が編成された。この甲種食糧増産隊については主としてその年の国民学校卒業生が対象となったのだが、「昭和十九年（一九四四年）四月編成の甲種増産隊募集の際は所謂賣れ残りの少年を掻き集める観を呈し、員数を揃へるにも優秀なる者を揃へるにも手遅れを感じた」ため、翌「昭和二十年度（一九四五年）の編成は右の如く二月より編成し、未だ在学中ではあつたが、別に決定を見た「國民學校高等科兒童ノ農業ニ對スル通年動員ノ取扱要綱」に據つて入隊させ、學校及家庭を離れて隊生活をなさしめた」という⁴⁵。一方で、各市町村が編成する「常備軍」として乙種食糧増産隊が結成され、一九四四年には全国で百万人が参加している。初年度は十七才から二十五才までの農村青壮年によって隊編成が行われたが、一九四四年度以降は、十四才から十九才までの男子へと募集年齢が引き下げられている。

しかし、実際に集まった子供たちは、規律の行き届いた「常備軍」というには程遠いものであった。次の文章を読むと、滑稽というよりもあまりにも哀れな少年たちの姿が彷彿としてきて、私は涙を禁じ得ない⁴⁶。

少年農兵隊が一つの部隊である限りにおいて、贅澤でない農兵隊の心理にピタリと合ふやうな服装、持ち物を一通り揃へ、隊伍を整へるといふやうな施設資材は、現在の情勢では充分に行き渡らない。従つて現状では移動訓練する場合など各隊員の持ち物は、兵隊さんのやうに背囊と、銃の代わりに鍬、靴の代わりに地下足袋で、隊伍堂々と行くといふやうな譯にいかないで、現状のまゝで行くとすれば、バスケットを持つもの、雑嚢を下げるもの、風呂敷を背負つたり、ハイカラなのはスーツケースで、ゲートルを巻かぬもの、地下足袋は皆履いてゐるが服装は揃つてゐない、まるで重慶の敗亡兵が逃げ廻つてゐるやうな恰好になると農兵隊に對する希望と憧れを有つて集まつた少年が自己の姿を見て何だかしよんぼりしよげ返るといふ所があります。

「生ける言葉」への傾倒

これまでに見てきたように、石黒忠篤によって進められた「食糧戦争」の基本原理は、隊組織による農事訓練であつた。その訓練の頂点をなすのが加藤完治が校長をつとめた満蒙開拓青少年義勇軍訓練所であり、裾野を形成するのが修鍊農場である。両者の源泉はいずれも加藤完治が校長をつとめた国民高等学校、あるいはその前身ともいふべき山形県自治講習所である⁴⁷。これらの中堅農民の養成施設は、教科書を用いて教育を行う文部省認可の学校とは異なり、人格者たる教師と起居を共にし、「生ける言葉」によって人格の陶冶を行う塾風教育を標榜してい

⁴⁵ 註 22 参照。125 ページ

⁴⁶ 「農兵隊訓練を見る」、1944、『村と農政』第 6 巻第 6 号 24 ページ

⁴⁷ 註 25 参照。1 ページ

た。グルントヴィが創設したデンマークのホイスコーレをモデルとしており、加藤完治はこれを「国民高等学校運動」と呼んでいる⁴⁸。

この「国民高等学校運動」の発端となったのは、那須皓が訳したホルマン著『國民高等學校と農民文明』⁴⁹であるが、一連のデンマークブームの切っ掛けとなったのは、佐藤寛次が訳した『丁抹の復興』である。その後、満州移民を推進する加藤完治グループや内村鑑三をはじめとするキリスト者たちを中心に、下記のような一連の著作が出版された⁵⁰。

佐藤寛次訳、レビュー・オブ・レビュー誌の一文「丁抹の復興」（明治 37 年）

矢作榮藏訳、ハガード著「丁抹の田園生活」（明治 38 年）

那須皓訳、ホルマン著「國民高等学校と農民文明」（明治 43 年）

内村鑑三著「デンマルク國の話」（大正 2 年）

加藤完治述「丁抹の國民高等學校に就て」（大正 11 年）

矢野一郎著「北歐でんまーく物語」（大正 13 年）

小出満二著「デンマルク農民教育」（大正 13 年）

山田勝伴著「余が見たる丁抹の農村」（大正 14 年）

フォート著、水野常吉訳「丁抹の農村と其の教育」（大正 14 年）

協調會教務課編「丁抹に於ける農村の更生と教育」（大正 15 年）

平林廣人著「デンマアク農民の努力」（昭和元年）

ホルマン著、木下一雄訳「丁抹の國民教育と國民大學」（昭和元年）

田子一民著「恵まれざる日本農村とデンマークの農民精神」（昭和元年）

小出満二・内山數雄「デンマーク農村生活」（昭和 3 年）

平林廣人著「デンマルク」（昭和 3 年）

長崎常著「現代丁抹の農村研究」（昭和 4 年）

上塚司著「理想的農業国デンマーク土産」（昭和 4 年）

野田義夫著「丁抹國民高等學校の研究」（昭和 4 年）

岩井尊人著「最近のデンマルクと農業の合理的共同經營」（昭和 4 年）

平林廣人著「丁抹農村文化の眞髓」（昭和 5 年）

大橋清藏著「丁抹文化の精髓と農村教育」（昭和 5 年）

⁴⁸ 註 25 参照。2 ページ

⁴⁹ 『國民高等學校と農民文明』ホルマン著、那須皓訳、1910、東京堂

⁵⁰ 『農村における塾風教育』、1934、財團法人協調會 2 ページ

『農村における塾風教育』⁵¹によると、国民高等学校運動の流れの中で大きなものは、1) 山形県立国民高等学校、日本国民高等学校、山陰国民高等学校、瑞穂精舎、神風義塾、大分県立玖珠農学校、西海農学校、長野県青年講習所、遊佐実業公民学校、那加高等国民学校などの国民高等学校グループと、2) 賀川豊彦が代表を務めた武蔵野農民福音学校、杉山元治郎が代表を務めた日本農民福音学校などをはじめとするキリスト教の一連の農民福音学校グループである。松前重義がグルントヴィの影響を受けて建学した東海大学も後者の流れに含めてよいかもしれない。日本農民福音学校は賀川豊彦および杉山元治郎の協力により一九二七年（昭和二年）に開校された最も古い福音学校であり、設立の趣旨は「デンマークのグルンドウイツヒの精神に従ひ、人格的教育を施し、農村改造のために十字架を負ひて、突進する戦士を養成す」となっていた⁵²。石黒忠篤が若かりし頃、賀川豊彦を訪ねて農民組合について意見を聞いた時、賀川は「自分ハ農民問題ニ付テハ何等ノ造詣ガナイガ著述ノ報酬ガ澤山這入ツタカラ此ノ金ヲ以テ農民ヲ向上サセル運動ニ向ヒタイ」と述べたことが知られている⁵³。私は、ここで国民高等学校運動がキリスト教と極めて親和性が高かったことを指摘せずにはおられないのである。

内村鑑三は農務局長時代の石黒忠篤を評して「彼はクリスチャンではないが、クリストの精神をもった立派な人間である」と評しており⁵⁴、また石黒のブレインとも称すべき小平権一は内村鑑三、新渡戸稲造の薫陶を受け、海老名弾正より受洗したクリスチャンであった。加藤完治も石浦町教会の富永牧師より受洗したクリスチャンであった。国民高等学校運動とキリスト教との共通項は「生ける言葉」への傾倒である。

両者がおしなべて酔いしれたのはホルマンが論じた「生ける言葉」というフレーズである⁵⁵。

国民高等學校は書籍に頼つてはならぬ。活ける言葉が學校に於て覇を稱するものでなければならぬ。其演述は人格的にして力と詩趣とを併せ有し演者と聴者との間に精神的結合をなさしむる如きものでなければならぬ。國民高等學校の基礎は誠に之に存し、其深く國民を動かすに至った秘訣は全く是に過ぎぬ。國民高等學校の教師には言語を以て聴者を動かす才能が大いに發達して居る。此學校の教師たる第一の資格はクリステンコールド（Kristen Kold）の語を籍りて云へば其の聴者を感動せしむる事である。コールドはスプレッヘン（Sprechen、語る）とアンスプレッヘン（Ansprechen、感動させる）との間に區別を立てた。單に語る（スプレッヘン）とは教壇上及び大學講壇上の講演を（書きたる物を讀み上ぐ

⁵¹ 註 52 参照。

⁵² 註 52 参照。114 ページ

⁵³ 『日本農民組合成立史論 I 日農創立と石黒農政のあいだ—第 3 回 IL0 総会—』林有一、1984、金沢大学経済学部論集 5 巻 56 ページ

⁵⁴ 註 24 参照。217 ページ

⁵⁵ 註 51 参照。77-79 ページ

る場合を除きて）一般に指すのであつて是等講演者は必しも悉く其聴者を感動（アンスプレッヘン）せしむるの才能を有しては居らぬ。勿論此特別の技能は之を發達せしめ得るものであつて多くの有名なる國民高等學校教師の演説の才能は確かに非常なる練習と勞力との結果であるが、然し此技能も亦凡ての他の技能と同じく自然の素質に基因するものであつて練習によつて仕上をなす事は出来るが只練習のみに依て得らるべきものでは無い。國民高等學校教師の講義は學者的の單純なる事實口述でもなく辯論家的の演説でも無い。教師は殊更に歡喜を以て語るわけではなく又辯論家の誇張せる修辭を用ふるのではないが尚且人の肺腑に迫り人の注意力を捕へて放たざる所の深き情熱の底流が講演全體に漲つて居る。

杉野忠夫は加藤完治が語った言葉を以下のように印象深げに紹介している⁵⁶。

「デンマークの國民高等学校と農業文明」の中にある「リビングワード」の訳語の味わい方です。那須博士は之を「生ける言葉」と訳し、デンマーク国魂の教師は皆雄弁で「生きた言葉」で、生徒に講義をすると訳しておられることについて、加藤先生は「リビングワード」とは單なる雄弁ではない。又「言葉」そのものでもない。物を言わんでもいい。「青年の魂を動かすインスピレーションそのものだ」と味わう可き説明をされた。

ホルマンの解釈は、シュプレッヒェン（語る）とアンシュプレッヒェン（感動させる）の違いから説き起こした極めてドイツ的な解釈であり、加藤完治の解釈は「以心伝心」ともいうべき「言葉」の持つ本来の役割とは真反対の日本的解釈である。私はグルントヴィ自身著作である『ホイスコーレ（上）（下）』（小池直人訳、2014、風媒社）などを調べてみたが、彼がいう「生ける言葉」とは1）（教科書という文語に対する）語りかけによる口語、2）（死せるラテン語に対する）母語としてのデーヌ語、を指しており、ホルマンや加藤完治による「生ける言葉」の解釈はグルントヴィが元来意図したものとはかけ離れているように感じられる。

いずれにせよ、グルントヴィに帰せられることになった「生ける言葉」のもつインパクトは絶大であった。例えば、岩波編集部編『國語』（一九三五年、岩波書店）が「生ける言葉」を取り上げているが、「学習指導の研究」によると本文はフィヒテ「獨逸國民に告ぐ」第四講から思想的影響を受けているとのことで、下記の説明がなされている。

- ・ 言語が人間に作らるゝよりも人間が言語に作らるゝことが遙に多い。
- ・ 各の言葉はその何れの部分に於ても生命であり且つ生命を作るのである。

⁵⁶ 「生きた言葉について」江坂彌太郎、杉野忠夫先生追悼文集、1966、三祐印刷 66 ページ

- ・ 人間が言語を話すのではなくして人間の本質がこれを話すのである。それ故に同じ本質を有する他の人間にそれが通ずるのである。

内村鑑三は一九三〇年（昭和五年）一月十二日の日記に以下のように書いている⁵⁷。

本年第一の研究会である。何しろ壇上に現はる々事が出来た。伊豆久連興農学園々長平林広人が来て丁抹国農聖人グルントビーの信仰に就いて話して呉れた。強く一同を感動せしめた。「活ける言葉とは人の全身全性格を通うして働く所の言葉である」と云ふのであった。まことに其通りである。我等研究会々員は今日まで余りに多く言葉を言葉として受けこれを我等の衷に働かしめなかった。平林君はグルントビーが丁抹を救うた途に依り日本を救はねばならぬと云うた。即ち農業を基督教的信仰化して救はねばならぬと云うた。自分も同意見である。新年早々基督教の実行的方面が高調されて感謝である。今後更に平林君の指導に依るであらう。

ちなみに日本のキリスト教会では、いまでも「生ける言葉」が極めて重視されている。確かに聖書そのものには「生ける言葉」というフレーズがなくはないが（例えば、使徒行伝7章38節、ペテロの第一の手紙1章23節、ヘブル人への手紙4章12節など）、内村の解釈のような言葉そのものの生命性がいわれているのではなく、もっと単純に「生ける神」が語る言葉という意味である。本論から逸れるが、日本のキリスト教のイビツなところは、「生ける神」に対する畏敬（パイエティ）を欠いたまま、「生ける言葉」が独り歩きするところにあると私は思っている。国民高等学校運動では「生ける言葉」が洗脳の道具として用いられたのだが、失われた言葉のリアリティーを取り戻すことが、私たちに課せられた重要な使命であると考えざるを得ないのである。

佐藤寛次の戦況判断

さて、石黒の企図した「食糧戦争」は、その後どのような経緯を辿ったであろうか。佐藤寛次は戦況判断ともいえるような下記の文章を、「戦時下農業雑感」（1944年4月、『教育農藝』所収）と題して発表している。

多くの親子兄弟を第一線に送り、又は軍需工業に應徴して、家族員数の減少を見ながら、尚老若男女の労働力を駆り集め、其の就業時間を延長し、睡眠時間をさえ縮減しつつ隣保相助の功を擴大しながら、増産の實を挙げ、米麥諸類の割當に對する供出は勿論、其の自家用保有米の大部分迄犠牲的に之を供出

⁵⁷ 内村鑑三全集第三十五卷、1983、岩波書店

した上に、麻類、藁工品、乾草等苟も戦力増強に資すべき事項に對しては全力を擧げてその成績達成に邁進しながら、尚健康なる子女の育成、剛健なる志氣の錬成に當り、國力の基本であり、大東亜共榮圈確立の礎石たる日本農村及び農業の爲に血塗の戦線を確保しつつあるのが農業者である。…山田守る老翁や少年の手を以て、交戦國最大の豊富なる食糧供給の可能性は小規模なる家族經營にある所以を稽へ、敵米國の機械農業が日本人八十人の仕事を一人にて爲すことを賛美することなく、米農人一人戦争に召集せられる時は、日本人八十人を召集せられたのと同じ所以を察して、我の彼に勝る所以を知ることが甚だ肝要である。

佐藤寛次は加藤完治グループとは距離を置いていたと見做すことができ、自身の訳書が嚆矢となったデンマークの国民高等学校については、あまり関心を示していなかった。私は、佐藤が時局を正確無比に把握していたことに驚きを覚えつつも、この切迫した絶望的な状況を、「雜感」として教育雑誌に寄稿できた真意を測りかねている。佐藤の現状分析に依拠すれば、「食糧戦争」における敗戦は免れ得ない帰結となるはずだが、この不謹慎な正論を、あえて「雜感」と題した彼の心根は、何故なるものだったのだろうか。

石黒忠篤の敗戦認識

石黒忠篤は、敗戦時の農商大臣であったが、入閣にあたって鈴木貫太郎首相に「この内閣は、戦争をやめるための内閣でしょう」と問い、「私を農商大臣になさる理由は、軍が戦争に負けて引き下がるというのじゃなくて、日本が食糧のために、戦争をやめざるを得ないのだという、戦争の責任を食糧の責任に持っていこうということでしょう。それならば農商大臣を引き受けてもよろしい。それでなければ、私が農商大臣になる必要はありません」（傍点筆者）と述べたといわれている⁵⁸。石黒が「軍が戦争に負けて引き下がるというのじゃなくて、食糧のために、戦争をやめざるを得ないのだという」幕引きをしようとしていたことは注目に値する。つまり彼は、「食糧戦争」では負けていないという自負を持っていたのである。むしろ、「食糧戦争」の完遂を妨げたのが、軍事的な敗北であるというのが彼の認識である。そして「食糧戦争」には負けていないという自負があったからこそ、敗戦の責任を担うというポーズを取ることができたのだし、裏を返せば、自ら指揮した「食糧戦争」の実際の責任については決して担おうとはしなかったのである。

私は、太平洋戦争当時の農政者や農学者たちは、おしなべて「食糧戦争」における自らの敗北を認めていないと断言できる。本著で折に触れて取り上げた人物たち、石黒忠篤にせよ、加藤完治にせよ、その他、橋本傳左衛門、那須皓、佐藤寛次、杉野忠夫、いずれを取り上げても、

⁵⁸ 註 22 参照 135 ページ

敗戦の自覚がなく、ほぼ戦前と戦後が連続してしまっているという特徴を指摘できる。私が勤めている東京農業大学の場合も、専門部拓殖科の廃止と農業拓殖科開設の間には、十年以上の断絶が存在するものの、杉野忠夫という結節点を通して見る時、植民地経営から海外移住、あるいは国際協力へと重心は移ってきているものの、ふさわしい自己改革を伴わずに他民族を裨益しようとする姿勢など、いまだに満州移民の面影を引き摺っているのではないと思われることが少なくない。

戦後に引き継がれた「食糧戦争」

上記のような農学者や農政者における敗戦意識の欠如は、軍の関係者とはかなり異なった様相を呈しているのではないと思う。武力戦争の場合、一応、八月十五日で勝敗が決し、敗戦が確定した。もちろん、満洲を含め、アジアの各地で、敗戦後にも戦闘が続いたケースは少なくない。しかし、食糧事情に関しては、植民地を失った戦後の方がむしろ悪化した面もあり、「食糧戦争」は敗戦後も存続したといえる面が多分にある。事実、日本国内では、食糧増産隊は開拓増産隊に、修練農場は経営伝習農場に、報国農場は開拓基地農場と名称を変更して存続したし、隊組織による食糧増産という原理に至っては、そっくりそのまま戦後に引き継がれていたのである⁵⁹。いまだ満洲の報国農場隊員たちが生死を賭けた難民生活を送っていた時期、石原治良は敗戦をものともせず以下のような活動を行っていた。

農林省は、終戦後の重大な事態に対処するため、昭和二〇年十一月九日「緊急開拓事業実施要領」を閣議決定し、百六十五万 ha の開墾干拓、百万戸の入植を急速に完遂する大方針と計画を打ち出した。

是に応じ、治良の従来担当していた食糧増産隊を、昭和二十一年度から「開拓増産隊」と改称し、編成運用の全般を変更して実施することとなり、二十一年一月二十五日開拓局長より地方長官宛て「昭和二十一年度開拓増産隊実施要項」を通達した。…

その趣旨は、右の閣議決定実施要項に基づく開墾干拓及び入植を完成するため、之が推進力として農家二三男、復員者、戦災者等の中、開拓興国の熱誠に燃ゆる青壮年を結集して隊を編成し、開墾干拓、大規模土地改良等に挺身せしめ、併せてその実践を通じて、開拓農民たるに必須の精神技術を体得せしめ、隊期間（一カ年）満了後開拓地に入植、新農村の建設に当たらしめ、以て開拓国策の完遂・食糧増産の達成に寄与し、日本再建の基盤を確立せんとするにあった。

⁵⁹ 註 18 参照。111-112 ページ

石原はその後も「産業開発青年隊」（一九五一年：昭和二十六年）や「農村建設青年隊」（一九五二年：昭和二十七年）の政策立案やその実施に関わっていくのであるが、自著『農事訓練と隊組織による食糧増産』の冒頭で、その不変ぶりを以下のように述べている⁶⁰。

抑々農の道、百姓の踐み行ふべき道は、平時も戦時も變ることなきもので、『産みなさぬものなしといふあらがねの土はこの世の母にぞありける』といふその母なる大地に農民はしつかりと取組み、天地生成化育の力に参贊して、ひたすら動植物の命をはぐくみ育て、之を以て自己を養ふと共に廣く世の人々を養ふものであつて、農民は土に深く根を下ろし、土を離れることなく、土を愛し、農を重んじ、農に生き、農を護り、農を興すを以て農民の本領とする。古来農は国の本といはれるが、その國の本たる農の眞義に徹して農の天職に精進し、逞しい農業農村を確立して農家自身の安定向上を圖ると同時に、農を以て國家民生を安んじその興隆に貢獻するは農民の使命である。それはまことに平時に於ても、戦時に於ても一貫して變ることなきものであり、變つてはならぬものである」（傍点筆者）。

蛇足かもしれないが、石黒忠篤の「食糧戦争」で重要な役回りを演じた国民高等学校は日本農業実践学園に、満蒙開拓青少年義勇軍訓練所は鯉渕学園に、八ヶ岳中央修練農場は八ヶ岳中央実践農業大学校に名称が変更され、今の時代に至っている。またこれらの諸施設と双子の関係にあるキリスト教関係の教育施設も、いまだにデンマークへの憧憬を引き摺りながら存続しているものが少なくない。

「食糧戦争」がもたらした未決の責任

石黒忠篤が「食糧戦争」に際して大量の外米を輸入したことは先述したが、それが東南アジアの人々にどのような結末をもたらしたかについて、一言したい。それは、何度も東南アジアを訪問しながら、このことに思いを致すことができなかった私自身の罪責告白でもある。

倉沢愛子は「日本の進出と東南アジアの形成」という論文⁶¹の中で、日本の占領期からその直後にかけて東南アジア全域で見られた米不足の問題を取り上げ、「数的に見れば東南アジア全域では、戦争状態で外との交易がなくなっても、十分自給できるだけの米の余剰生産力を持っていたはずだった。しかし地域間の移動が機能しなかったために、余って腐るほどの状態だったところがある一方で、無いところでは非常に深刻な飢餓状態であったという米の偏在状態があり、日本の占領地全域に非常に深刻な米不足と、それから波及する混乱をもたらしたと言え

⁶⁰ 註 20 参照。1・2 ページ

⁶¹ 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ：総合的地域研究の手法確立：世界と地域の共存のパラダイムを求めて、倉沢愛子、村嶋英治、1996、18：29-37

るだろう。米の絶対的供給量の減少に加えて、偏在状態が問題を深刻化させたと指摘しておきたい」と述べている。さらに「そして全占領地に当てはまる一番深刻な問題は、日本軍の米穀統制政策がうまく機能しなかったことだろう。これは日本国内の政策を模したものだだったが、現地の社会に馴染まなかった。現地自活を強調するあまりに、かなり小さな区域内の米の移動のみが許され、その境を超える自由な移動は禁じられた。全ての余剰米はいったん中央に集め、中央の政策に基づいて不足地域に送る。例えば、不足地域のすぐ隣に余剰地域があっても、直接の移動が禁止されて送ることができないという効率の悪さがあった。また日本の農業組合をはじめとする組合方式の統制も現地に馴染まず破綻してしまった」ことを指摘している。その結果、例えば、ベトナムでは二百万人、インドでは三百五十万人という人々が、餓死に追い込まれたといわれている。早乙女勝元著『ベトナム“200万人”餓死の記録』には、ヴォー・アン・ニン氏が撮影した当時の生々しい写真が何枚も掲げられており、餓死者の人数もさることながら、その強烈なリアリティーに思わず息をのんでしまう⁶²。阿鼻叫喚とは、正にこのような状況をいうのであろう。「一九四五年飢餓の記録」と題された写真集のキャプションのいくつかを以下に列挙しておこう。

「何でも食べた、拾ったネズミの死骸さえも」

「まだ若い母親は極度の栄養失調で早産し、赤ん坊は生まれてすぐ死んだ」

「2人の子どもが父親の口に粥を流し込むが、すでに顎が硬直しており、粥は外にこぼれる」

「死にそうなわが子を見つめる父」

「飢えて痩せ細り、歩くのもやっと」

「この子たちの親はみんな死んだ」

「残された子」

「一握りのご飯を分け合う若い女性たち」

「痩せさらばえた青年たち」

「どこへ行ってもこうした光景に出くわした」

「捨てられた腐敗臭のする田螺を食べる人々」

「ナムディン〜タイビン間の路上でよくみかけた光景」

「学校に通っていた年頃の少女も生死の淵に」

「家でこの子だけが残った」

「みなし児の群れ」

「無人となった村」

⁶² 『ベトナム“200万人”餓死の記録』、早乙女勝元、1993、大月書店、129-144 ページ

「荒れはてた市場、うち捨てられた家。この村の医者も死んだ」

「路上の人びと」

「ハノイのザップハット集中キャンプ」

「日本軍が護送するコメ運搬車を襲う人びと」

「子どもも大人も死んでいった」

「大人、子ども、老若男女、あらゆる死体が」

「街路で集められた死体は、一か所に乱雑に置かれた」

「運び去る車を待つ死体、死体」

「食べ物拾いに行った人が行き倒れになっていた」

「死体を牛車にのせ、埋めに行く」

「埋葬」

「3年後に遺骨を洗い浄める」

「埋葬」

「埋葬地の発掘」

「撮影者、ヴォー・アン・ニン氏（写真 市原京子）」

ところで、先に引用した石黒の外米輸入の苦労話の中で、「商業者諸君の國家に協力して貰った努力」という言葉が出ていたが、これは主として三井物産のことを指している。「食糧戦争」を煽った政治家や学者の責任も大きい、戦争の度に肥え太っていく「死の商人」が果たした役割についても、明らかにしなければならないことが山積している。戦時中に朝鮮や台湾や満洲で暴利をむさぼっていた人物が、東南アジア諸国に対する戦争賠償の一翼を担ったことも大問題である⁶³。このように大東亜共栄圏で暗躍していた様々な人物が、まさに人脈として戦後日本の政界や財界に跳梁跋扈し、今日に至っているという歴史的事実は、あらゆる艱難辛苦に対して自ら「受忍」することを受け入れてきた、私たち庶民の責任であるというほかない。私は海外にいる友人たちから、なぜ日本人は無教養で横柄な国家権力に対して寛容でいられるのかとしばしば問われるのであるが、世界の常識としては、寛容を示し受忍すべきは国家の側であって、決して庶民の側ではないのである。日本人の我慢強さは、美德というよりも、自分を偽る不誠実の帰結として、むしろ奇異の目で見られていることを知っておく必要がある。

⁶³ 例えば、久保田豊など。「전후 일본의 아시아시장 재진출에 관한 연구」、김웅기、2011、*일본학보*、88:107-123。（「戦後日本のアジア市場再進出に関する研究—日本工営を中心として—」、キムウンギ、2011、*日本学報* 88:103-127）

私たちはまた、かつての「食糧戦争」が決して昔話とは言えないことにも気がついているはずである。スーパーで山積みになっているバナナ、インドネシアの熱帯林を伐採して栽培されるアブラヤシ、児童労働の産物といわれるチョコレートなど、私たちが何気なく口にしたり利用したりするものが、いわゆる途上国の人びとの「受忍」に立脚していることを私たちは知っている。他者の「受忍」に無関心でいられるのは、私たち自身が「受忍」にならされてきたことの反証ともいえるであろう。

受忍論の要諦は「ひとしく受忍すべき」というところにあるのだが、この文言は「平等性」を担保しているように見せかけながら、本当はひとしくないひとりひとりの被害についての掘り下げを断念させようとする悪意を伴っている。したがって、十把一絡げにできない、かけがえのないひとりひとりが、それぞれ良心の命ずるところに従って生き、そして自らに押しつけられた苦悩を掘り下げることによって、他者の負っている苦悩に対しても無関心でいられなくなるような社会を構築していくことが求められている。

それにしても、人を生かすための食糧が、経済搾取の道具に成り下がっていることは、人類にとって、憂うべき悲劇である。食糧は確保すべきものであるよりは、分かち合うべきものである。私は“オール・ジャパン”などというかけ声を聞く度に、かつて産官学が一体となり挙国一致体制の中で遂行された、あの「食糧戦争」を思い起こして不安になる。最近復活した「攻めの農業」⁶⁴というキャッチフレーズも、宣戦布告のように感じられて仕方がない。

最後に一私自身のこと

幼くして父親を亡くした私の母は、中学を卒業してすぐ、浜松の紡績工場に集団就職した。ひなげしが好きだった母は、花作りを職とする父と結婚し、そして生まれたのが私である。私が中学生になった頃、両親はささやかな家庭文庫を開設したのだが、そこで私が手にしたのが早乙女勝元氏の『ベトナムのダーちゃん』⁶⁵であった。私はそれ以来、ベトナム戦争のこと、ベトナムの人びとのことを意識するようになった。

私が勤める東京農大がハノイ農大と姉妹大学になったのを契機に、私の学科が所属する国際食料情報学部でもプロジェクトが企画され、私もはじめてハノイ近郊の紅河デルタや北部の山間地域を訪問する機会に恵まれた。そこで出会ったハノイ農大の先生たちは、同級生がベトナム戦争に従軍しているさなか、将来を担ってルーマニアやソ連に留学していた人たちで、筋金入りの勉強家であった。ベトナム人は千年以上にわたって中国の侵略を食い止め、フランスの占領に抵抗し、ベトナム戦争でアメリカに勝利し、ユニークな共産主義を維持しつつ、アオザ

⁶⁴ 安倍晋三政権が掲げている「攻めの農業」という方針は、三木武夫内閣に農林大臣として入閣した安倍晋太郎の所信演説を継承したものである（1974年）。

⁶⁵ 『ベトナムのダーちゃん』、早乙女勝元（著）、遠藤てるよ（イラスト）、1974、童心社

イやフエ料理などに代表されるベトナム固有の文化を発展させている。しかも、反中国、反ヨーロッパ、反アメリカの姿勢を保ちながら、科挙や漢字、箸などの中国文化、フランス料理や西洋建築などのヨーロッパ文化、ジャズやコカコーラなどのカジュアルなアメリカ文化を变幻自在に取り入れており、そのたくましさには敬意を抱かずにはおられなかった。

私は一九八六年のドイモイ以降にベトナムで急速に普及するようになったハイブリッドライスについて研究を行った⁶⁶。当時、ベトナムに大量に流入しはじめていた中国産のハイブリッドライスは、ベトナムの先祖伝来の在来種に比べると、確かに灌漑が十分に確保できる場合には増収をもたらしたが、地元の白葉枯病に弱く、低温によって不稔が生じがちで、自家採種した種子を次のシーズンに使えず、また肥料もたくさん必要とすることなどを明らかにした。さらにハイブリッドライスの食用部分は交配第二世代にあたり、一粒一粒の遺伝組成が異なるために、宿命的に味がまずいという特徴を持つ。私は、ハイブリッドライスの危険性を糾弾することによって、なにがしか地元の人びとに貢献することができたのではないかと密かに喜んでいたのであるが、実は、私が調査を行ったあの場所こそ、かつて、日本の「食糧戦争」の結果、二〇〇万人ともいわれる餓死者を出したとされる、その場所だったのである。二〇〇万人といえば、かつて満洲の地で凍土の果てに命を落とした、すべての日本人の数よりもなお桁違いに多い数である。もちろん、死者の数だけで歴史を語るのナンセンスであり、すべての人の人生が、ひとつひとつ慕わしく追憶されるべきである。死は決して集団化されるべきではない。しかし、かつてこの国の「食糧戦争」の余波によって大量の餓死者を出した、その歴史的な現場に立ちながら、何の痛痒も感じる事のできなかった私自身に、そのようなことを指摘する資格はない。私は今、ただ忸怩たる思いを抱くのみである。

私は、ソウル出身の女性と結婚し、日本の植民地支配と朝鮮戦争を生き延びた義父と同じ屋根の下で暮らし、かつて朝鮮の教会に神社参拝を強要した教派に属する教会に通い、満洲報国農場の悲劇を引き起こした大学に勤務して、学生たちに熱帯農業に関する講義を行っている。打ちのめされそうな過去の重荷を引き摺りながら、少しずつ対話の機会を与えられてきた私の胸に去来するのは、『譯詩集・乳色の雲』に掲げられている異河潤の「野菊」という小さな朝鮮詩である⁶⁷。

⁶⁶ “A Case Study on Hybrid Rice Production in Red River Delta in Vietnam”, Kaihei Koshio, Hiroshi Hosoda, Hee-ock Boo, Takeshi Inoue, Tamae Sugihara, Le Van Lanh and Du Vinh Hoa, Journal of ISSAAS 11(2):49-53, 2005年06月

⁶⁷ 註9参照。

愛ほしや野に咲く菊の
色や香やいつれ劣らね
野にひとり咲いては枯るる
花ゆゑにいよよ香はし。

野の花のころさながら
この國に生へる^{うたびと}詩人
ひとり咲き ひとり朽ちつつ
偽らぬうたぞうれしき。

私は「生ける言葉」が語られなければならないことに心から同意するが、それは同時に「偽らぬうた」でなければならないと思う。言葉が生き生きと茂って豊かな実りを結ぶためには、心根深くから水分や養分をくみ上げる必要がある。「根深葉茂」という農業の根本を追究する農学者として、私はいま、そんなことを考えている。